人権教育指導者向け学習資料

KARA FULL

人権のいろ　いっぱい

いまKARA　ここKARA　わたしKARA

No.19
テーマ
スポーツと人権

令和６年１１月　福岡県教育委員会
福岡県教育庁教育振興部人権・同和教育課
福岡市博多区東公園７－７
ＴＥＬ　０９２－６４３－３９１８
ＦＡＸ　０９２－６４３－３９１９

■「スポーツにおける人権」KARA …… Ｐ２
■「環境をつくる」KARA …… Ｐ４
■「選手に寄り添い尊重する」KARA …… Ｐ８
■「安心できる居場所をつくる」KARA …… P12
■「おすすめＤＶＤ」KARA …… P16

障害者OK　学校教育OK　利用の際には必ず下記サイトを確認ください。
www.bunka.go.jp/jiyuriyo

※全ページの上下に音声コードとその位置が分かる切り欠きを付けています。
※県庁ホームページからスクリーンリーダーソフトによる読上げも可能です。

スポーツにおける人権について考えてみる

今夏、フランスのパリにおいて、オリンピック・パラリンピックが開催されました。人種や性別などに関係なく、様々な立場の人が一生懸命に挑戦し活躍する姿に、多くの人が夢を抱き、感動しました。しかし、一方で選手に対するインターネット上の誹謗中傷問題が社会問題として、大きく取り上げられるなど、スポーツに関わって個人の尊厳を傷つける人権侵害が明らかになっています。これを機に、スポーツにおける人権について考えてみませんか。

1　スポーツは全ての人々が享受すべき基本的人権であるという理念

1978（昭和53）年にユネスコ総会で採択された「体育およびスポーツに関する国際憲章」において、基本的人権を行使するための基本的条件の1つが「すべての人が肉体的、知的、道徳的能力を自由に発達させ保持する」ことであり、そのためには、体育・スポーツへのアクセスがすべての人々に保証されるべきであるという「スポーツ・フォー・オール（Sports For All）」の理念が謳われました。その後、その理念は広く浸透し、1994（平成6）年に国際オリンピック協会（IOC）がそれを「オリンピック憲章」に取り入れました。

また、日本においても1961（昭和32）年に制定された「スポーツ振興法」を2011（平成23）年に改定した「スポーツ基本法」の中でスポーツを行う人の権利（いわゆるスポーツ権）が明記されました。

オリンピック憲章【オリンピズムの原則 】2015改訂（抜粋）

スポーツをすることは人権の1つである。すべての個人はオリンピック・ムーブメントの権限の範囲内で、国際的に認知されている人権に関し、いかなる種類の差別も受けることなく、スポーツをすることへのアクセスが保証されなければならない。オリンピック精神は友情、連帯、およびフェアプレーの精神とともに相互理解を求めるものである。

スポーツ基本法【前文】（抜粋）

スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性などに応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保されなければならない。

2　スポーツが直面している様々な人権侵害

現在、スポーツにおける人権侵害に関しては、暴力（性暴力）、虐待、様々な差別や不平等、ハラスメント（性的ハラスメント）などが指摘されています。多様性を承認し、人間が人間らしく活動するために、スポーツにおける人権侵害を防止し、安心・安全なスポーツ環境を形成するための継続的な取組が求められています。

スポーツにアクセスできない
- ○バリアフリーの施設ではない
- ○専門の指導者がいない
- ○高い費用がかかる　など

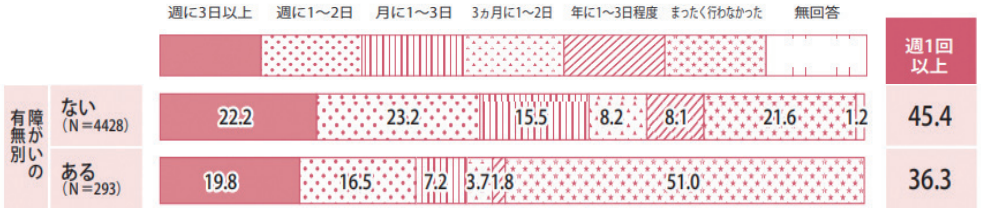
指導者のハラスメント行為
- ○選手への高圧的な態度・暴力
- ○性的ないやがらせ
- ○故障を招くオーバーワーク　など

人種や性別など属性による差別
- ○選手への差別的言動や誹謗中傷
- ○肌の色、性別、性的指向、障がいなどを理由とした不当な扱い　など

①　差別を受けることなく、スポーツに参画する機会が確保されているか？

「この1年間に行った運動やスポーツの実施頻度」のデータによると、前回調査より上昇しているものの、障がいのある人は障がいのない人と比較すると実施率が低い傾向にあります。「障がいのある方が、よりスポーツ活動に参加できるようにするために必要なこと」という問いに対しては「障がい者スポーツ活動ができる施設」「障がい者スポーツ指導者」「施設までのアクセスの良さ」などを求める回答が多く挙げられています。スポーツをしたい、と思った時に、すべての人がスポーツに親しみ、楽しみ、支える活動に参画することのできる機会の確保が求められています。

「この1年間に行った運動やスポーツの実施頻度」



出典：「福岡県スポーツ推進計画」（福岡県　令和６年３月）より

②　安全かつ公正な環境の下で、スポーツに親しみ、楽しむことができているか？

過去には、オリンピック代表を含むスポーツ選手が監督やコーチの暴力及びパワーハラスメントを告発する事案が発生するなど、スポーツの指導における暴力などの問題が、近年メディアで大きく取り上げられています。2013（平成25）年に日本オリンピック協会（JOC）は、スポーツにおける暴力行為の根絶に向けて、日本体育協会、日本障害者スポーツ協会、全国高等学校体育連盟、日本中学校体育連盟とともに集会を開催しました。多くの競技団体や都道府県体育協会関係者、アスリートなども参加する中、**「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」**が満場一致で採択され、スポーツにおける人権侵害の防止を確認しました。

このようにスポーツ界では安全かつ公正な環境の下で、スポーツに親しみ、楽しむことができるように、スポーツに関わる人々の暴力行為根絶への主体的な取組が進められています。

スポーツ界における暴力行為根絶宣言（一部）

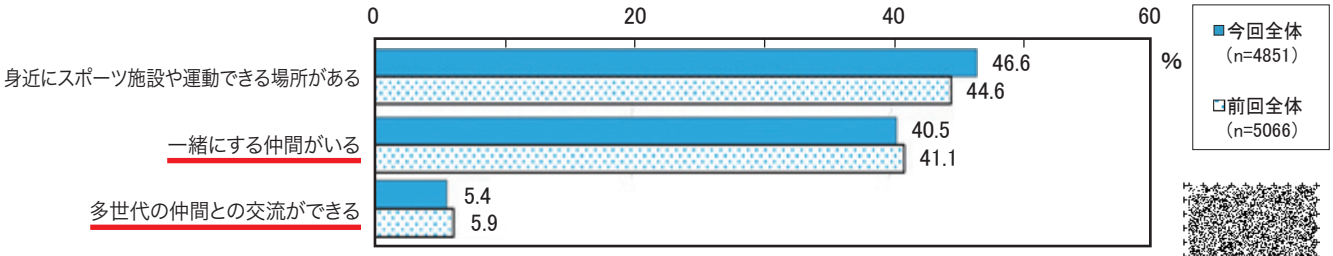
指導者は、…暴力行為がスポーツの価値と相反し、人権侵害であり、全ての人々の基本的権利であるスポーツを行う機会自体を奪うことを自覚する。暴力行為による強制と服従では、優れた競技者や強いチームの育成が図れないことを認識し、暴力行為が指導における必要悪という誤った考えを捨て去る。スポーツを行う者のニーズや資質を考慮し、スポーツを行う者自らが考え、判断することのできる能力の育成に努力し、信頼関係の下、常にスポーツを行う者とのコミュニケーションを図ることに努める。

暴力行為・・・殴る、蹴る、突き飛ばすなどの身体的制裁の他に、言葉や態度による人格否定、脅迫、威圧、いじめや嫌がらせ、さらにセクシュアルハラスメントが含まれる。

③　スポーツを通じて、幸福で豊かな生活を営むことができているか？

「運動やスポーツを行うための条件」として、「身近にスポーツ施設や運動できる場所がある」などの物的環境の必要性をあげる県民が約半数近くいます。また「一緒にする仲間がいる」や「多世代の仲間との交流ができる」などの仲間の必要性について回答した県民も約半数います。つまり、スポーツを行う上で、施設などの物的環境だけでなく、一緒にスポーツをする仲間など、人的環境が整うことも、条件として重要視されていることが窺えます。さらに、その仲間は誰でもよいのではなく、「一緒に活動をして楽しい人」「助け合い協力できる人」など心理的安全性の保たれる仲間の存在が必要です。部活動や地域のスポーツクラブにおいて、差別的な言動又はいじめなどの人間関係を理由に、スポーツを辞めざるを得ない人たちもいます。スポーツを行うにはお互いの人権を尊重し合う仲間の存在が、幸福で豊かなスポーツライフにつながります。

「運動やスポーツを行うための条件」



出典：「県民の運動・スポーツに関する調査報告書」（福岡県　令和５年３月）より

すべての人がスポーツを楽しむために
～誰もがスポーツに参画できる環境をつくる～

オリンピック憲章の中では、「スポーツをすることは人権の１つである。」と謳われています。人種や肌の色、性別、性的指向、出自などを理由としたいかなる種類の差別も受けることなく、すべての人がスポーツを楽しむために大切なことについて考えるために、「車いすバスケットボールチーム」のライジングゼファーフクオカWheelchair（ウィルチェアー）と「車いすツインバスケットボールチーム」の博多パトラッシュに取材を行いました。

車いすバスケットボールを通して～ライジングゼファーフクオカWheelchairの取組～

車いすバスケットボールは、車いすに乗れば誰もが同じように競技できる、パラ競技としても大変注目を集める魅力的でパワフルなスポーツです。アメリカのNBAのチームは車いすバスケットボールを傘下に置くチームも数多くあります。しかし、日本では、練習できる環境が少なく、知名度も高くない状況でした。

ライジングゼファーフクオカは、福岡をホームタウンとするプロバスケットボールチームで、福岡に“もっと必要とされる”クラブをめざして、今も挑戦を続けています。当時、すでに地元福岡で活躍していた車いすバスケットボールチームと出会い、「地域を盛り上げたい。」「子どもたちに夢を与えたい。」「日本でバスケットボール、車いすバスケットボールを広げたい。」などのそれぞれの想いから誕生したのが、ライジングゼファーフクオカWheelchair（ウィルチェアー）です。日本のプロバスケットボールチームとしては初めて車イスバスケットボールチームを傘下に収めることになりました。

※ライジングゼファーフクオカは、県内各小中学校の児童生徒などを対象に、人権・スポーツ教室を開催し、スポーツを通して人権の大切さを伝えるなど、人権擁護上顕著な功績があったことを認められ、平成28年法務省人権擁護功労賞を受賞しています。

今回は、二人の選手にお話を伺いました。

小学2年生の時に、病気の影響で車いすでの生活となりました。「一生寝たきりの状態か、電動車いすの生活かもしれない。」と言われていましたが、当時の病院の先生のすすめで車いすバスケットに出会い、その楽しさに魅了され今日まで競技を続けることができています。

高校生のとき、事故の影響で左足を切断することになりました。入院中ベッドの上で見た北京オリンピック・パラリンピックのニュースで車いすバスケットボールを知りました。取り上げられた時間はわずかでしたが、心に残っていました。たまたま家の近くにチームがあったので体験会に行きましたが、競技用車いすに乗った瞬間に「やってみたい！」と思い、入部を決めました。

赤窄　大夢(あかさこ　ひろむ)選手
背番号3番　ポジション／PG
世代別日本代表

RIZING ZEPHYR FUKUOKA

福澤　翔(ふくざわ　しょう)選手
背番号39番　ポジション／PF、C
元日本代表

© RIZING ZEPHYR FUKUOKA

（所属は取材当時（令和６年１０月）のもの）

お二人は、ライジングゼファーフクオカWheelchairの前身チームの時から、チームの中心として活動し、現在は、企業とアスリート契約を交わして活動されています。

すべての人がスポーツに参画するために大切なことって何だと思いますか？

環境だと思います。自分はもともとスポーツが大好きだったので、できなくなるかもしれないと言われた時、この先自分の人生で楽しいことはあるんだろうかと悩みました。スポーツ以外にやりがいを見つけようとも考えましたが、周囲のすすめでバスケに出会い、周囲の支えで続けることができて本当に幸運でした。自分には周囲の人が支えてくれる環境がありました。

今のチームは、働きながらチームに参加している人がほとんどです。チームが好き、バスケが楽しいという気持ちは同じでも、そこに注ぐことができるエネルギーには差があると思います。でも、それぞれができる範囲で「自分らしい参加の方法」をキャプテンとして守っていきたいと考えています。一方で、自分は、企業のサポートもあり競技に専念できるので、プレーでチームを引っ張り、成績を残して日本代表に入らないといけない。活躍することで車いすバスケットの人口を増やして多くの人が参加できるきっかけになりたいです。

赤窄選手

「自分らしい参加の方法」を

今考えているのは、初心者から経験者まで幅広く参加できる体制を整えることの重要性です。車いすバスケットボールって思っている以上に激しいスポーツで、初めて見る人はびっくりすると思います。現在僕たちは、プロチームの一員として、勝ちにこだわっている部分もあり、初心者やケガなどで一度競技から離れた人は、参加しにくい環境にあると感じています。いろいろなチームがあって誰もが楽しめる環境を作らないといけないと思うんですけど、実際には、練習できる場所もサポートスタッフも限られている難しい状況です。練習場所、サポート、競技人口を増やし「誰もがいつでも」参加できるような環境をつくりたいです。

福澤選手

「誰でもいつでも」という環境を

今後どのような活動をしていきたいですか？

講演会、体験会などいつでも呼んでください！

赤窄選手

福岡県は、パラスポーツが本当に盛んなんですが、その情報が皆さんに伝わっていないと感じています。僕は、幸運にも車いすバスケットボールに出会えて、人生が変わりました。でも、まだまだ、競技をする環境も情報も十分ではありません。環境や情報不足のためにスポーツをやりたくてもできていない人達も沢山いると思います。

現在は、学校などに訪問して、車いすバスケットボール体験会や、人権講座などを行っていますが、まだまだ不十分だと思っています。もっと情報発信の機会を増やさないといけないと考えています。そのためにも先ずは車いすバスケットボールの人気を高めて「参加したい」「参加できる」スポーツにしていきたいと考えています。

情報発信の機会を増やす

福澤選手

バスケで学んだことを、たくさんの人へ伝えたい！

RIZING ZEPHYR FUKUOKA

© RIZING ZEPHYR FUKUOKA

取材を終えて

ライジングゼファーフクオカは、日本で初めて車いすバスケットボールチームを傘下に収め、すべての人にスポーツの機会を保障するため、バスケットボールや車いすバスケットボールを通してスポーツの魅力を発信しています。車いすバスケットボールチーム：ライジングゼファーフクオカWheelchairでは、障がいの有無、性別などに関わらず、様々な立場の方が所属し活動を行っていました。今回お話を伺ったお二人は、もっと多くの人に車いすバスケを知ってもらって一緒に楽しみたい、そのためにできることは何でもやりたいと話されていました。

車いすツインバスケットボールを通して～博多パトラッシュの取組～

皆さんは、車いすバスケットボールとは別に、車いすツインバスケットボールというスポーツがあることをご存じでしょうか。車いすツインバスケットボールを25年以上している博多パトラッシュの代表　眞子武臣さんに、車いすツインバスケットボールとは、どのようなスポーツなのか、取材を行いました。

【プロフィール】 **眞子　武臣（まなこ　たけおみ）さん**　博多パトラッシュ代表

1990年　大学在学中に交通事故により受傷
1997年　ツインバスケットボールチーム「博多パトラッシュ」設立
2010年　日本車椅子ツインバスケットボール選手権大会初出場
2016年　選手引退　以後コーチ、チームフロントとして活動中

（所属・役職は取材当時（令和６年１０月）のもの）

Ｉ　車いすツインバスケットボールについて、教えてください。

車いすツインバスケットボールは、下肢のみではなく、上肢にも障がいのある方でも参加できるように考え出されたスポーツです。これまで「車いすバスケットボールをしてみたいな。」と思っていても、「高さが3m以上あるゴールリングにシュートが届かない。」や「他のプレーヤーの早い動きについて行けない。」などの理由から参加を断念した障がい者もいると思います。そういった人たちにとって、この車いすツインバスケットボールは、より多くの人が楽しむことができるスポーツとして誕生しました。

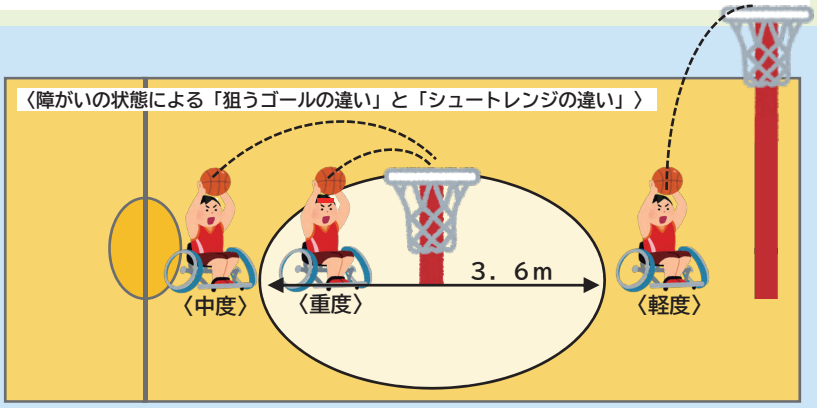
その最大の特徴は、ツインという名前の通り、二種類のゴールが設けられているというところです。従来の車いすバスケットボールに使用されている正規のゴール（高さ：3.05m）の他に、もう一つの低いゴール（高さ：1.2m）があります。それを正規のゴールまで届かない選手のためのゴールとしました。

さらに低いゴールの周囲には3.6mの円があり、その円の内側と外側で、シュートする選手を区別しました。これらによって、それぞれの選手が自分の障がいに応じて、ゴールを決めることができます。ゴールの設置位置の高さは一例ですが、車いすツインバスケットボールでは、ゴームにだれもが出場し、だれもが活躍できるように、ルールの調整がなされています。

皆が活躍できるように、ルールの調整がなされたスポーツ

ゴールリングが上と下に2つあるのです！

障がいの状態によって、円内プレーヤーと円外プレーヤーに分かれます。



〈プレーヤーのメンバー編成について〉

車いすツインバスケットボールは、1チーム5人でプレーします。「手を持ち上げることが困難」「上のゴールにシュートが届かない」などの状態をもとに、各選手には持ち点が決められます。重度の障がいのある選手ほど低い点数になっており、軽度の障がいのある選手のみで出場するなどの偏りをなくすため、5人の合計点が基準点内に収まるようにメンバーを編成するルールとなっています。

2 車いすツインバスケットボールを始めたきっかけを教えてください。

大学在学中の19歳の時に、バイクで交通事故に遭いました。その後、飯塚にある総合せき損センターに入院し、それから、リハビリのため、大分県にある重度障害者センターに入所しました。そこで車いすツインバスケットボールというスポーツがあることを知りました。しかし、その時はあまり興味を持てませんでした。3年間のリハビリ生活を終え、自宅に戻りましたが、休学中に大学を退学したこともあり、とても時間を持て余していました。その時に思い出したのが、車いすツインバスケットボールでした。「ツインバスケットボールなら今の僕にもできるのではないか」と考えたのです。そこで、同じ境遇の仲間二人と連絡を取り合い、ツインバスケットボールを始めることにしました。何からやり始めたらいいのか、悩んでいた時に、相談に乗っていただいたのが、福岡県障がい者スポーツセンターでした。私たちの練習場所の紹介やサポートスタッフ（FHSの会）の派遣をしていただきました。また、春日市社会福祉協議会にも私たちの運営をサポートするボランティアを紹介していただきました。その方たちのおかげで、私たちはスポーツを楽しむことができています。私たち選手の多くは重度な障がいを持っています。そのため、活動していくためには様々な支援が必要です。例えば、普段使っている車いすからバスケットボール用の車いすに乗り換えたり、手にテーピングを巻いたりすることにもサポートが必要なのです。

県障がい者スポーツセンターや春日市社会福祉協議会のサポート

3 車いすツインバスケットボールのよさは、なんでしょうか？

私自身のことでいうと、ツインバスケットボールを通して、身体機能の向上を図ることができたことです。車の免許を取得できたのは、ツインバスケットボールを通して体を動かしていたからだと思います。そして、このスポーツのよさは、ツインバスケットボールは重度の障がいのある人でも楽しむことができる上、障がいのあるなしに関わらず、多くの人がこのスポーツを楽しむことができるところにもあります。例えば、小学校や中学校へ学習の一環で呼ばれることもあるのですが、車いすに乗り、足を使わない条件を揃えることで、私たちは子どもたちと一緒にこのスポーツを楽しむことができます。他にも、国際医療福祉大学や久留米大学の学生さん方にボランティアスタッフとして参加していただきながら、一緒にツインバスケットボールを楽しんでいます。たくさんの人たちとつながり、楽しむことができることもこのスポーツのよさだと思います。

ボランティアスタッフとして参加していただきながら、一緒に楽しむ

【スポーツと人権】の視点 KARA

パラスポーツは元々リハビリテーションとして生まれたものですが、今では健康の保持増進であったり、自らの人生を楽しむためのものであったりと、様々な理由で行われています。スポーツについて、オリンピック憲章やスポーツ基本法には「スポーツをすることは人権の１つである」などの記述があります。そのため、障がいのある人も含めたすべての人にスポーツを親しみ、楽しみ、支える活動に参画できる機会が保障されなければなりません。

すべての人がスポーツを楽しむための１つの要素として、誰もがスポーツに参画できる環境をつくることが考えられます。例えば、サポートスタッフやバリアフリー施設、スポーツ器具、ルールの調整やそれに関する情報発信などです。今回は車いすバスケットボール及び車いすツインバスケットボールについて取材しましたが、その他のスポーツにおいても、スポーツに参画できる環境をつくることは大切なのではないでしょうか。

「FHSの会」とは？

（一社）福岡県障がい者スポーツ協会では、パラスポーツの推進に寄与することを目的に「初級パラスポーツ指導員養成講習会」を実施し、講習会修了後、希望される方に「FHSの会」に登録していただき、スポーツ活動へボランティアスタッフの派遣を行っている。
（※FHS=Fukuoka Handicap Sports support の略）

すべての選手が心からスポーツを楽しむために
～一人ひとりに粘り強く寄り添い、選手の意思を尊重する～

福岡ソフトバンクホークス（以下「ソフトバンクホークス」と表記）は、１９８９年に福岡ダイエーホークスが福岡の地で誕生して３５年間、ここ福岡県で長年運営されている野球チームの１つです。この１０年の間に５度の日本シリーズの優勝を果たした日本を代表するプロ野球チームです。その下部組織に、NPO法人ホークスジュニアアカデミーがあります。高度な技術、専門知識そして豊富な経験を有する会員相互の協力により、地元九州を中心に日本の野球発展普及に対する支援活動を通じ社会貢献することを目的としています。指導者による体罰及びパワーハラスメントなどが社会問題となっている昨今、ソフトバンクホークスジュニアチームの監督 帆足 和幸さんにインタビューを行いました。帆足監督は地元福岡県小郡市生まれ。「スライドパーム」など変化球を武器に、ソフトバンクホークスの日本一にも貢献された方です。「スポーツと人権」をテーマに指導者として大切にされていることについてお話を伺いました。

©SoftBank HAWKS

©SoftBank HAWKS

【プロフィール】 帆足 和幸（ほあし かずゆき）さん

ソフトバンクホークスジュニアチーム監督。福岡県小郡市出身の元プロ野球選手（投手）。福岡県立三井高等学校を卒業後、九州三菱自動車に所属し、社会人野球を経て、プロ野球選手となる。西武ライオンズとソフトバンクホークスの2球団で活躍し、2015年にプロ野球を引退。2019年からソフトバンクホークスジュニアの監督を務めている。NPO法人ホークスジュニアアカデミーでは「九州を中心に日本の野球発展・普及に対する支援活動を通じ社会貢献をする」「運動の場の提供や親子・家族間の交流を含めた地域住民との交流事業を行うことで子どもの健全育成に寄与する」の2つの理念をもとに、指導者として関わっている。

（所属・役職は取材当時（令和６年１０月）のもの）

©SoftBank HAWKS

１ 指導者として、選手を育てるにあたり、大切にしていることを教えてください。

私一人で大切にしていることではなく、ホークスに関わる監督やコーチなど、全ての指導者が大切にしている育成方針があります。それは「ホークスメソッド」です。「自ら考え、学び、自己実現できる選手を育てる」ことを指導理念として掲げ、 **「主役（選手）の意志を尊重し、一人ひとりに粘り強く寄り添う」**ことを、指導者の役割と定義し、野球を指導する上で大切なことを、以下7点で示しています。

1 選手をよく「観」よう
2 「長所」を見つけ、伸ばすことを助けよう
3 「気づき」を与え、自ら考えることを促そう
4 小さな「成功体験」を重ねて、やる気を引き出そう
5 「競争」や「挑戦」を通じて、成長を加速させよう
6 過去の経験や知識にとらわれず、「学び」続けよう
7 周りと連携し、みんなで「育成」しよう

©SoftBank HAWKS

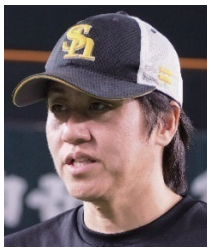
1 2 3 4 5 6 7

このメソッドがあることで監督やコーチなどの共通理解が図られ、選手への適切な指導につながっています。ホークスメソッドは王会長や小久保監督などの意見も取り入れながら、作成されました。

主役（選手）の意志を尊重し、一人ひとりに粘り強く寄り添う

2 監督になった当初、選手を育てることで苦労されたことを教えてください。

最初の1～2年目は、正直言うと、上手く指導することができず、あまり楽しくありませんでした。選手のプレイを見て「なぜ、こんなこともできないのか！」とイライラする毎日で、今思うと、自分がこれまで受けてきた指導をそのままやってしまい、その結果、子どもたちとの心理的な距離が生じてしまっていたように思います。そんな日が続いたある日、自分が「上から目線」になっているのではないかということに気づきました。「子どもと同じ目線で向き合わなければならない。できないことを怒るのではなく、悩んでいる選手に寄り添いながら、その壁を一緒に乗り越えようとするスタンスが大切ではないか」と。そう考えると、今まで見えていなかったものが見えてきました。ミスした選手のくやしい表情、逆に成功した時のうれしい表情もよく見えるようになりました。一人一人への指導や声かけも変わっていき、教えることがとても楽しくなってきました。ホークスメソッドの「**選手をよく「観」よう**」につながります。



選手と同じ目線で向き合う

3 今と昔では、指導の仕方は、どんな風に変化していますか？

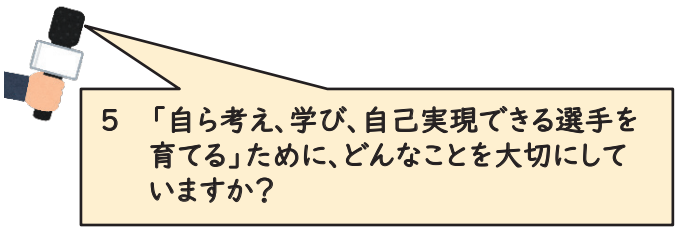
昔のスポーツの指導場面では暴力や暴言、非科学的・非合理的な指導が少なからず行われ、指導に対する正しい知識が足りなかったのではないかと感じています。私も練習中に水を飲んではいけないとか、関節や筋肉を傷める可能性の高いトレーニングをした経験があります。また、スポーツアニメの影響もあり、根性論だけで指導する指導者もいました。もちろん、スポーツに対する熱い思いは大切なのですが、誤った指導の結果、ケガをして競技を辞める選手もたくさんいたのではないでしょうか。僕自身も、選手時代、野球が楽しくない時もあり、辞めたいと思ったこともありました。本来スポーツは一人一人が楽しむためにあるものです。いわゆる監督中心主義、勝利至上主義では、楽しいものではなくなってしまいます。しかし、残念ながら今でもそのような指導を受けているチームを見かけることがあります。そこで、ソフトバンクホークスでは「主役（選手）の意志を尊重し、一人ひとりに粘り強く寄り添う」ことを指導者の役割と定義しています。主役は選手で、その周りに、サポートする監督やコーチがいて、保護者がいて、地域の人たちがいるものなのです。その考え方を持っていれば、選手のミスに感情的になり、暴言・暴力を行うことは減っていくのではないでしょうか。

選手の周りに、サポートする監督やコーチや保護者などがいる

4 選手の指導に、つい感情的になってしまうことはありませんか？

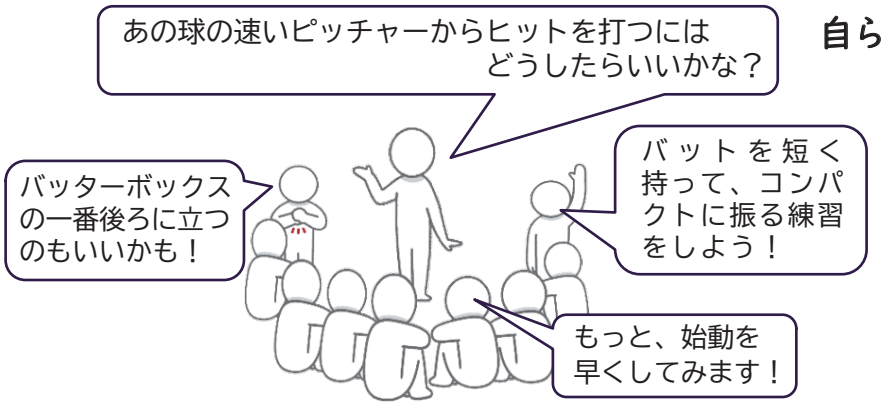
根本的に、選手のミスは、選手のせいにするのではなく「自分の指導力不足」と認識すべきです。選手は一人一人違います。1回の指導で分かる人もいれば、10回の指導が必要な人もいます。それを見極め、支え続けるのが指導者です。失敗したくてしている人なんて、誰一人いません。一番くやしい思いをしているのは選手本人でしょう。その思いに寄り添い、「励ましの声かけ」と「適切な指導」を行うことが大切なのではないでしょうか。そして、その指導方法が、本当にその選手にとって最善なのかを常に問うことが必要だと思います。壁を乗り越える方法を一緒に考える、考え続けることが大切だと思います。ただ、私も、相手チームに失礼なプレイをしたり、仲間をいじめるような態度を取ったり、礼儀をわきまえなかった時など、フェアプレイの精神を欠いた時は、きちんと叱ります。野球を通して、技能面のレベル向上はもちろんのこと、人としても成長してほしいと考えています。

技能向上だけでなく、人としての成長も考える



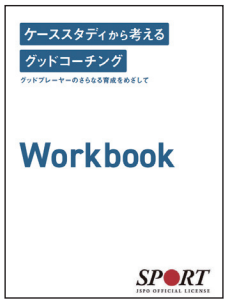
選手たちが「自分の考えを伝え合う場」を大切にしています。試合後のミーティングでは、こちらが「あのプレイは良かった！あのプレイは悪かった！」と言いたくなることをグッと押さえて、まずは選手たちの主体性を大切にした話合いの場をつくります。話し慣れていないうちは沈黙の時間が続くかもしれませんが、少しずつ子どもたち同士で話し始めます。自分の意見を伝え、お互いにアドバイスをするようになり、問題を解決するために協力できるようになります。その話合いの間は、指導者は見守ります。話合いの中に、これから指導すべきヒントがあるからです。グラウンドに立っているのは選手です。様々な状況の中で、最適な選択を瞬時に行わなければなりません。指導者の指示を待ってからでは間に合わないため、自ら判断し、主体的に行動できる選手が必要とされているのです。主体性を育てるためにも話合いは大事です。「それならば、指導者は何も言えないのですか？」という声が聞こえてきそうですが、私の場合は、以前のミーティングの内容を踏まえて、練習前に、今日の練習で大切にしてほしいことを確認します。 また、練習前に選手に「今日はどんな練習がしたい？ 必要だと思う？ なぜ？」と自ら考えるように問いを投げかけます。もちろん、こちらで前もって練習メニューを考えていますが、あえて聞くようにしています。すると、選手が自分やチームに必要な練習を考えるようになります。その意見を練習メニューに取り入れることで、選手のやる気を引き出すことにもつながります。時には、指導者が考えていた以上に、より良い練習メニューが生まれることもあります。そのようなやりとりを通じて「自ら考え、学び、自己実現できる選手を育てる」ようにしています。自分が出した意見によって、チームが成長する。それが選手が主役になれるチームの特徴です。そのような体験は自分の自信につながり、野球の大きな楽しさの１つとなるでしょう。

自ら考えるように問いを投げかける



人権に配慮した指導者の育成「公認スポーツ指導者」 KARA

日本スポーツ協会（JSPO）は、より良い指導者になるための支援として「ケーススタディから考えるグッドコーチング～グッドプレーヤーのさらなる育成をめざして～Workbook」を作成しています。その中でより良い指導者の一例として「いかなる暴力やハラスメントも行使・容認せず、プレーヤーの権利や尊厳、人格を尊重し、公平に接することができる人」を示すなど、日本スポーツ協会（JSPO）においても、人権に配慮した指導者の育成を図っています。



（上記「Work book」に関するURL ： https://www.japan-sports.or.jp/coach/tabid1402.html）

6 様々なスポーツにおいて、選手に関わる指導者へメッセージをお願いします。

ホークスメソッドの「**過去の経験や知識にとらわれず、「学び」続けよう**」「**周りと連携し、みんなで「育成」しよう**」とも関係するのですが、選手に一歩近づくと、監督として見る景色が、変わって見えてきます。自らの指導者としての信念を持ちつつ、常に学び続ける姿勢を大切にしてほしいです。多くの指導者に共通することとして、自分たちがこれまで受けてきた指導方法が１つのモデルとしてありますが、それが良いものもあれば、今の時代や選手には合わないものもあります。選手の人権を侵害するおそれもあるかもしれません。昔のやり方に凝り固まらず、常に学び続ける姿勢、選手の人権を尊重する姿勢を大切にしなければいけません。

私の少年野球時代、厳しい指導の中で辞めたいと思ったことが何度もありました。実際に辞めていった仲間もいます。だから、今の選手にはまずは野球を楽しんでほしいと思うし、楽しみの１番は主役になることだと思います。そして、主役とは決してピッチャーや４番バッターだけではありません。みんな主役になれます。そんな楽しいスポーツならずっと続けられることでしょう。私たち指導者の一方的な行き過ぎた指導によって、選手の楽しくスポーツできる環境を奪ってはいけない。私もこれから選手と一緒に野球を楽しみたいと思っています。

【スポーツと人権】の視点 KARA

オリンピック憲章には「いかなる種類の差別も受けることなく、スポーツをすることへのアクセスが保証されなければならない」、スポーツ基本法には「安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、楽しみ…」とあります。しかしながら、暴言・暴力やパワーハラスメントなどを理由にスポーツを辞めざるを得ず、スポーツへのアクセスを阻害され、スポーツを楽しむことができなかった選手もいます。そのようなことを起こさないための大切な考え方の１つが、ソフトバンクホークスの指導理念でもある「主役（選手）の意志を尊重し、一人ひとりに粘り強く寄り添う」ではないでしょうか。

監督中心主義や勝利至上主義から脱却し、選手が主役となって、指導者は一人ひとりに寄り添い、サポートする。そのような関係では、暴言・暴力やパワーハラスメントなどは起こらないのではないでしょうか。

「合言葉はPlayers First！！」KARA

これまで野球についてみてきましたが、他の競技においても
「選手が主役」という考え方が大切にされています。

〈子どものサッカーに関わる大人の皆さんへ〉

合言葉は、子どものサッカー環境をよくする仲間として、Players First!!

**サッカーは考えるスポーツ
自分で考えて
自分で行動できること
それが一番うれしい。**

**今日の結果ではなく、
明日子どもが
どんなプレーをするかを
楽しみに指導すること**

**子どもを一人の選手として
リスペクト。
子どもの良い
お手本になろう。**

出典：「合言葉はPlayers First！！」（公益財団法人 日本サッカー協会）より

日本サッカー協会でも「Players First！！」を合言葉に、選手を第一に考えたより良いサッカー環境をつくる取組を行っています。それは選手のスポーツを行う権利の保障につながっています。

誰もが幸福で豊かなスポーツライフを送るために
～安心できる居場所をつくる～

「スポーツを心から楽しむことができる豊かなスポーツライフにおいては、差別は存在しない。」そう語るのは、春日市を拠点に活動する総合型地域スポーツクラブ NPO法人 春日イーグルス 会長の渡邊さん。

自分自身もサッカーの技能を育成することや勝利至上主義に囚われていたという渡邊さんが、そのような考え方から脱するきっかけとなったのはどのようなことだったのでしょうか。また、どのようなことを大切にしながら子どもたちとかかわっているのでしょうか。「スポーツと人権」というテーマをもとにお話を伺いました。

【プロフィール】 渡邊　透（わたなべ　とおる）さん

総合型地域スポーツクラブ NPO法人 春日イーグルス ／ 会長

日本体育大学在学中より東京都目黒区鷹の子SCでサッカー指導を始める。１９８９年、春日イーグルスに育成コーチとして加入する。育成普及にかかわり、クラブからは日本代表も輩出した。現在、春日イーグルス会長、春日市スポーツ推進審議会委員などを務めている。日本サッカー協会B級コーチ、オランダサッカー協会ユース育成コーチ、日本スポーツクラブ協会公認クラブマネージャー資格を有している。

２０２３年、春日イーグルスは４０年以上にわたり多年代、多志向、多種目のスポーツ振興に尽力されたことが評価され、AFC(アジアサッカー連盟)主催の「AFCスペシャルグラスルーツアワード」「ベストグラスルーツクラブ」部門で日本初の金賞を受賞する。

※グラスルーツとは、年齢、性別、障がい、人種などに関わりなく、だれもが、いつでも、どこでも、サッカーを身近に楽しむことのできる環境を作ること。

（所属・役職は取材当時（令和６年１０月）のもの）

総合型地域スポーツクラブとしてNPO法人を立ち上げた頃のチーム内の様子について教えてください。

当時、小学校・中学校・高校・社会人の間に、春日イーグルスで育った一部の選手において、言語環境があまり良くなく、それを反映してかチームの雰囲気も良くありませんでした。そのようなチームの様子から、これまでの優秀な選手をサッカーの強豪校やプロチームに送り出すことや勝利至上主義に囚われていた指導の在り方を振り返りました。「プロの道に進まなかった子どもたちには何が残るのだろうか。」「このチームは、自分たちがめざしているクラブチームではないのではないか。」と反省しました。そこからクラブチームとしての在り方を改めて見直していくことにしました。その頃、福岡県サッカー協会において、「地域に根差すクラブチームをめざすべきだ」という機運が高まっていました。これは、「誰もが生涯の各時期にわたって、それぞれの体力や年齢、目的に応じて、いつでも、どこでもスポーツに親しむ」生涯スポーツの考え方とも通ずるものです。「その実現のためには何が必要なのだろうか」というところから、私たちのチームは再スタートしました。私たちのチームに必要なものを探すために、ドイツにサッカー視察に行きました。そして、そこには豊かなスポーツライフがあり、「豊かなスポーツライフにおいては、差別は存在しない」ということを感じました。その時の学びが今につながっていますし、今も学び続けています。

誰もが生涯にわたり、スポーツに親しむことができる環境

「エンジョイスポーツ」「生涯スポーツ」

春日イーグルスは、これまでスポーツを通して小学生、中学生、高校生、社会人の育成に取り組んで参りました。皆さんもご存じの通り、少子高齢化はさらに進み、ますますこの問題は深刻化していくことでしょう。このような社会情勢の中で、私達はスポーツを通してコミュニケーションを豊かにすることで、人を作り、育て、地域コミュニティの再生に一役を担うクラブとして、活動を広げていきたいと考えるようになりました。

NPO法人春日イーグルス　HPより

誰もがスポーツを楽しみ、豊かなスポーツライフを送るために

「誰もがスポーツを楽しむ」を実現するために、どのようなことを大切にしていますか？

「『発達障害』という診断を受けた子どもたちは、他のみんなと同じ場で学ぶ機会が少なくなっている。」という話を聞くことがあります。中には、学校に行くことができていない子もいます。集団の中に上手く入ることができない子、できないことがあるとパニックになってしまう子、全体に対する指示だけでは理解し行動することが難しい子など様々です。そのような時に、私たちは、子どもたちにチームに合わせるように強制するようなことはしません。待つことが必要な時には粘り強く待ちます。そして、こちらがどのような伝え方をしたら伝わるのかを考えます。ルールをどのように工夫したら、一緒にサッカーを楽しむことができるのか、本人はもちろん、チームメイトとも一緒に考えます。子どもたちのことは、子どもたちの方がよく理解していることもあります。だからこそ、子どもたちの意見を尊重しながら、決して指導者のエゴだけで進めないということを大切にしています。

「スポーツはコミュニケーションである。」という言葉があります。子どもたちはそれぞれに自分の課題を感じてます。「こんな練習をしたい。」という考えをもっています。もちろん私たち指導者も、子どもたちのことを丁寧に見取る中で練習プランを考えています。その両者の考えをすり合わせるためにコミュニケーションを丁寧にとるようにしています。自分たちの意見が聞き入れられた経験をした子どもたちには、主体性が生まれてきます。主体的に考え、取り組んでいく中で創造性も育まれていきます。

スポーツはコミュニケーションである

「スポーツをすることへのアクセス」を保証するために何か取り組んでいることはありますか？

総合型地域スポーツクラブとして再スタートする前に研修のため、ドイツに視察に行った際に感じたことがありました。ドイツでは、育成期には一発勝負のトーナメント戦が行われることはなく、基本的にリーグ戦を行います。リーグ戦だから、負けたとしても次があります。次があるから、子どもたちは次の試合に向けて、今回の反省点を受け、どのように改善していけばいいのかを考えることができます。そこには、誰かを責めるような雰囲気はありません。また、ドイツでは日本で行われているような九州大会、全国大会というような規模の大きい大会もありません。遠征をするとなると、交通費や宿泊費など、各家庭における経済的な負担はかなり大きいものになります。これは「スポーツをすることへのアクセス」を阻む壁の１つです。

また、他にも「スポーツをすることへのアクセス」を阻むものがあります。それが「ルール」です。春日イーグルスでは、チーム独自で「Eリーグ」（※Eagles（イーグルス）の頭文字の「E」）というリーグ戦を行っています。チーム独自のリーグ戦ですから、ルールは自由に変更することができます。多くのプレーヤーがフィールド上にいる中で、瞬時に多くの情報を処理しながらプレーすることは、かなり難しいものです。そのような状況の中で、参加が難しい子どもたちもいます。ルールに子どもたちを無理やり当てはめるのではなく、「どうしたら全ての子どもたちが楽しむことができるのか。」という視点で、コーチ陣がルールを考え変更しています。「プレーヤーの人数を減らす。」「ゴールキックは攻撃につながりやすいもっと近いところから行う。」など様々です。時には子どもからの意見を受けて、変更することもあります。

経済的な負担も、スポーツアクセスを阻む壁に

初めに「スポーツを心から楽しむことができる豊かなスポーツライフにおいて、差別は存在しない。」とお話しされていましたが、なぜそのように感じますか？

人それぞれ自分の考えをもっています。そして、人は往々にして、自分の主観で他人のことを指摘しがちです。そんな時に、私は子どもに、次のような言葉掛けをしたことがあります。

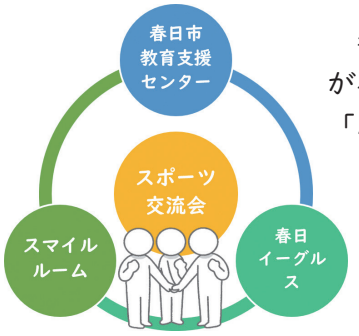
この手を見てごらん。私の真正面にいるあなたから見ると、あなたは私の手の平が見えるかもしれない。けれども、別の子どもには、私の手の平ではなく、手の甲が見えるかもしれない。同じ私の手であっても、見る場所によって、見る角度によって見え方が全然違う。それは人の考え方でも同じで『自分が正しい』『あなたは間違っている』と思っていることでも、それは自分の主観であって、本当にそれが正しいかどうかはわからない。だから、考えの違う相手に何かを伝えようとする時には、なぜそのような考えや言動に至ったのかを理解するためのコミュニケーションが必要になってくる。見え方の違う相手に、どのようにアプローチしたらいいのかをみんなで考えることが大切だよ。

そうすると、子どもたちは相手の行動を変えることを焦らず、待つことができるようになります。私たち大人も、急かすことは決してしません。そうすると、相手がなぜ、そのような考えに至ったのか、その背景が少しずつ見えてきます。子どもたち自身が自分たちの意思でミーティングを行い、コミュニケーションを取る中で、自ら気づいていくのです。

そのようなことを繰り返していると、自然と子どもたちからチーム全体の課題やチームメイト個人の課題について「ミーティングをしたい。」と訴えてくるようになります。時には、「最近、気になること（人）が…」と投げかけることもありますが、後は子どもたちに任せます。そのような中で、一方的に引っ張っていくのではなく「ファシリテート」ができるリーダーも育っていっています。チーム内には積極的に発言する子がいたり、反対意見を言う子がいたり、それをうなずきながら黙って聞いていたりする子もいます。発言できる子だけではなく、発言することが得意ではない子の考えも汲み取ろうとするような雰囲気が醸成されてこそチームとしての心理的安全性が保たれます。そんな中で育った子どもたちが今、コーチとして指導にあたってくれています。心理的安全性が保たれているような環境の中では、攻撃的な言動も少なくなります。このような環境がベースにあってこそ、豊かなスポーツライフを実現できます。そこには、差別は存在しないのではないかと思います。

心理的な安全性が保たれた環境の中で

「スポーツ交流会」 KARA



春日イーグルスは、春日市教育委員会と連携して、登校することや自分が在籍している学級に入ることが難しいお子さんを対象に、子どもたちの「心の充電」を目的としてスポーツ交流会を実施しています。

渡邊さんへの取材とは別の日に、再び取材に伺いました。この日は、春日市教育支援センター（マイスクール）から9人、春日市内の小・中学校のスマイルルームから11人の子どもたちが参加していました。行っていたのは、バドミントン。ダブルスのゲーム形式で、ローテーションを組んで活動が行われました。活動前には、イーグルスのコーチから「スポーツは楽しむもの、みんなで楽しんで」という声掛けが行われました。活動している子どもたちからは、ペアでハイタッチをしたり、お互いを気遣ったりする姿が見られ、子どもからも大人からも「頑張れ」「うまい」「おしい」「ナイス」という前向きな言葉が聞こえてきました。そこには心理的安全性が保たれた子どもたちの「居場所」がありました。

子どものころからチームに所属しているスタッフの方、ボランティアの大学生に話を聞きました。

子どもたちに接する際には、出来る限りプラスの声掛けをするように心がけています。「何がどう良かったのか」「なぜ、良かったのか」「以前と比較して成長したこと」など、出来るだけ具体的な声掛けをします。
自分たちもそのようにして、子どものころから指導を受けてきました。ですから、その頃から、ずっと楽しく活動することができています。
【大学生ボランティア】

大学院までスポーツについて学んできたことで、チームに貢献できたらと思い、チームスタッフとして戻ってきました。戻ってきたのは、今も昔も変わらず、ここが私の「居場所」だからです。今、サッカーの更なる技術向上をめざす子どもたちのために選抜チームをつくり、選択の幅を広げています。ただ、そこでの競争できつい思いをしてしまった子たちの精神的なバックアップをする体制もしっかり整えています。
【チームスタッフ】

【スポーツと人権 】の視点 KARA

春日イーグルスでは「誰もが幸福で豊かなスポーツライフ」を保障することを大切にされていました。その上で、キーワードとなっていたのが「安心できる居場所」ではないでしょうか。子どもたちにとっても、スタッフにとっても、ボランティアで関わる学生にとっても、春日イーグルスは「安心できる居場所」となっています。なぜ、春日イーグルスがみんなの「安心できる居場所」になり得たのか。その１つは「心理的安全性の保たれる仲間」がいたからだと考えます。それが「誰もが幸福で豊かなスポーツライフ」を保障する１つの要因となっています。これは、本誌の冒頭でご紹介した「オリンピック憲章」「スポーツ基本法」にも通ずるものではないかと考えます。

すべての個人は…いかなる種類の差別も受けることなく、オリンピック精神に基づき、スポーツをする機会を与えられなければならない。オリンピック精神においては友情、連帯、フェアプレーの精神とともに相互理解が求められる。
「オリンピック憲章　オリンピズムの根本原則」から

…スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、…
「スポーツ基本法　前文」から

渡邊さんは、インタビューの中で次のようなことをお話しされていました。

チームの中には集団の中で活動することが苦手な子どもたちもいます。そのような子どもたちは、様々な場面で集団の規律やルールに合わせることを求め続けられてきました。そのため、周囲の「当たり前」に一生懸命合わせようとします。私が「あなた自身は、本当はどうしたいの」と質問しても、周囲から求められるであろう建て前を語り、本音を語ることができません。そんな時は、本音が語ることができるようになるまで待ちます。その子が本当に求めていることが分かれば、そのことも踏まえて、誰もがサッカーを安心して楽しむことができるよう居場所をつくっていくことができるのです。

このような指導者の在り方を子どもたちが自然と学び取り、チームメイトに対する言動が変容し、練習に対する姿勢が変容していきました。そして、春日イーグルスは、自他の人権が守られた安心して過ごすことができる「居場所」へと変容してきました。そのことが、「誰もが幸福で豊かなスポーツライフ」につながっているのではないでしょうか。

人権教育ＤＶＤ貸出しのご案内

福岡県教育委員会では、人権教育・啓発に関係するDVDを貸出しています。人権問題について知ることは、人権教育・啓発の第一歩です。ぜひ、一度視聴してみませんか？きっと、新たな気づきが生まれるはずです。

福岡県　人権教育DVD

人権教育ＤＶＤの紹介ページに進みます

Ｒ５年度購入の人権教育ＤＶＤの紹介

1　『カンパニュラの夢』（36分）D0517

この作品は、「８０５０問題」（８０代の親が５０代のひきこもりの子どもを支えるなど）をテーマに、二つの家族の視点で物語が進行します。

超高齢化社会が進む今、家族の病気、親の介護、離職、経済的困窮、人間関係など、複合的な課題を抱えながらも地域の人々が互いの悩みを共有し偏見をなくすとともに、互いに助け合うことで課題解決をめざす人権啓発ドラマとなっており、様々な立場の人たちが、共に生きていこうとする地域共生社会の実現について考えることができる教材となっています。

2　『破戒』（119分）D0515

原作は、島崎藤村、不朽の名作『破戒』。父から、被差別部落出身ということを隠して生きるようにと強い戒めを受けた主人公の青年教師・瀬川丑松が「なぜ自分の故郷を語れない。なぜ好きな人に気持ちを伝えることができない。」と苦悩しながらも最後に人生の決断をする姿を通して理不尽な差別を描き、差別問題を現代に問いかける作品である。

１００年以上も前の原作を現代に蘇らせるべく、60年ぶりに映画化されたこの作品は、「部落差別とは何か」を問い直し、差別解消に向けそれぞれができることについて考えることができる映画（教材）となっています。

編集後記

▼今年パリオリンピック・パラリンピックが開催されました。選手の活躍する姿からは大きな感動をもらいました。人種、肌の色、性別、ジェンダーアイデンティティ、言語、宗教などに関わらず、お互いを励まし合い、称え合う選手の姿には人権尊重の精神が表れていました。▼しかしながら、ＳＮＳによる誹謗中傷など、様々な属性を理由に差別を受ける選手がいたことも事実です。▼スポーツにアクセスし、親しみ、楽しみ、支える活動に参画する権利はすべての人に保障されるべきものですが、現在その権利は十分に保障されているのでしょうか。本紙が人権が尊重される心豊かな社会の実現に向けて、読者の皆様が「スポーツと人権」について考える機会となれば幸いです。▼本紙の作成にはたくさんの方にご協力・ご尽力いただきました。この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。（三）

『KARA FULL』は福岡県教育委員会のホームページにも掲載しています。

KARA FULL 福岡 で 検索